

「偽りの平和」

～コロナ危機そして気候変動～

青 木 克 仁

False Peace: Coronavirus Crisis and Climate Change
in the “Anthropocene”

Katsuhito AOKI

安田女子大学現代ビジネス学部公共経営学科

要 旨 序 論

本論考の目的は、カール・ポPPERの「三つの世界説」を参照しつつ、「人新世」と呼ばれるようになった、この時代の意味を探ることにある。「人新世」は、「第三の世界」が「ミームの拡散」という意味において「第二の世界」を支配するにとどまらず、「第一の世界」にも巨大な影響力を及ぼすに至った時代なのである。今や「第三の世界」を統制する原理となった「グローバル市場」による「新自由主義」という形の資本主義とそれを牽引する「テクノロジー」による「進歩史観」の実にせつかな時間が「第一の世界」を変質するだけの強大な力を持ち始めている。その力は、ハイデガーが言うように、人間を「総駆り立て」状態に陥らせ、「総駆り立て」のシステムの中で人間は単なる「人材」あるいは、「消費者」と化し、そうしたものとしてシステムの中で最適化を図るだけの存在者に成り下がってしまっている。かくてグローバルに拡張した経済システムは、「気候変動」をもたらすに至った。本論考では、「第三の世界」におけるイデオロギー闘争において覇権を争う人類ではなく、今後、「第一の世界」において進化の時間を生き延びる可能性がある人類か否かが問われる、「人新世」と呼ばれる時代を考察する。

キーワード：三つの世界説、人新世、歴史の終わり、コロナ禍、気候変動

『ヨハネの黙示録』の第6章、第2節、第一の封印が解かれると最初のHorsemanが出現する。白い馬の乗り手であり、手には弓を携え、冠を被っているが、「勝利の上の勝利（支配）」を得る役目を担って登場する。時代ごとに様々な解釈が存在しているが、「偽りの平和」をもたらす乗り手だとされている。この後、第二の封印が解かれ、「戦争」を引き起こす赤い馬の乗り手が現れる。さらに第三の封印が解かれると、黒い馬の乗り手が地上に飢餓をもたらすためにやってくる。そして最後に、第四の封印が解かれ、蒼ざめた馬の乗り手によって、疫病や野獣が放たれ、地上は死に満ち溢れた地獄と化すのである。

時代は今、まさに、コロナ危機を迎え、気候変動による様々な災害に加え、「水戦争の時代」とも形容されるようになってしまった「水危機」とそれに付随して食糧危機を迎えることになるだろう。すると、この21世紀という時代は、赤い馬も黒い馬も、蒼ざめた馬も既に不吉な蹄の音を鳴らし始めているということになるだろう。そうだとすると、最初に登場する「白い馬の乗り手」とは何を象徴しているのだろうか。

「偽りの平和」とは、「人新世」の到来によって私達の反省に上るようになった「完新世」という、比較的穏やかで安定した地質学的年代のことであろう。この安定期が前提としてあったからこそ、私達人類は「歴史」を発展させ、諸々のアイデアを紡ぎ出し、様々な社会の構築を実験し得

たのである。そして「進歩」があり得るという夢を未来に向かう歴史的な遠点に投影し、「近代」と呼ばれる時代を築き上げようとしてきたのだ。実際に、産業革命が始まる頃までは、人間の経済活動は生態系の有する雄大な生産能力を前にして殆ど取るに足らない程度の規模であったため、地質学的な時代という、人間のライフスパンを遙かに超えているがゆえに想像し難い次元が前面に出てくることなどなかった。

しかし、2000年に、大気化学者、パウル・クルツェンが生態学者、ユージン・ストーアーマーと共同執筆したThe 'Anthropocene'の発表とともに注目され議論されるようになった「人新世」という概念は、最終氷河期が終わる約1万1700年前に始まったとされる「完新世 (Holocene)」に続く、新たに提案された地質時代の名称として提唱された。クルツェンは、ジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明をもって、石炭という化石燃料が爆発的に使用されるようになる1784年を「人新世」開始の年と位置付けている。開始の年代に関しては、議論が割れているが、近年、第二次世界大戦以降の「グレート・アクセラレーション Great-acceleration」と呼ばれる人間活動の爆発的な加速期を、「人新世」が開始される明確な時期とする見方を採用する論者が多くなってきている。「大加速化時代」とは、実質GDP、都市人口、海外直接投資、ダム建築、化学肥料や農薬の消費量、自動車台数などが加速度的に上昇し、二酸化炭素濃度上昇、オゾン層の喪失、海洋酸性化、熱帯雨林の消失面積の拡大、生物の大量絶滅等が引き起こされる時代なのである。新たに「人新世」と命名するという、この事態は、「歴史」を描き、「進歩」に酔い痴れることが可能となるための前提条件が存在していたことを、私達、人類に思い知らせることとなった。本論文において、私達は「人新世」と命名せざるを得ないような地質学的時代の到来とともに「偽りの平和」の時期が終焉を迎えようとしているからこそ、私達は何をしなければならないのかという問いを提起し、問いに対する思索を進めていきたい。

第1節 3つの世界説

カール・ポPPERは、彼の*Objective Knowledge*

の中で、「Thesis of the Three Worlds (三つの世界説)」(p.153)なるものを唱えている。彼のいう「三つの世界」とは、「第一の世界 (World1)」である「物質的世界」、「第二の世界 (World2)」である「心理的世界」、そして、人間の生み出した文化的産物からなる「第三の世界 (World3)」である。ポPPERは、この「三つの世界説」を進化史の中で捉え直している。ラマチャンドランは、『脳の中の幽霊』の中で、ダーウィンと並んで進化論を唱えたウォレスに言及しており、ウォレスこそが、人間において、ダーウィンが主張するような「自然選択」という力の作用だけではなく、「文化と呼ばれる強大な新しい力に遭遇した」(p.244)という。ラマチャンドランは続けて、言語、そして文化の誕生によって、人間の進化に「ラマルク流」の力が加わったということを述べている。これは、即ち、前世代が生涯に蓄積した知恵を、言語・文化を介して、次世代に伝えることが可能になったということを意味している。一種の獲得形質の遺伝という不可能とされてきたことが、言語・文化の登場で可能になった。言語・文化という「第三の世界」の誕生によって、彼が言うように、「脳は文化と共生関係にある」(p.244)ようになったのだ。確かに、言語は人間という一つの種においてのみ進化したという稀有な事実がある。こうして「第三の世界」の誕生は、ラマルク的な可能性を人類に開いたのである。

ラマチャンドランが指摘しているように、私達、人間の脳は、他の動物が辿った特殊化していく傾向を、言語・文化のお陰で回避し得た。例えば、キリンの首が長くなることで、キリンは、特殊化する方向に進化し、環境内で新しいニッチを占めるに至った。言語・文化の誕生のお陰で、人類は環境世界の一隅に閉じ込められてしまうことはなかった。勿論、脳という器官を進化させたがゆえの「言語」の創発であり、そのお陰による特殊化の回避ではあったが、特殊化回避の代償として、ニッチに収まり切れなかった人間は己の生存基盤を脅かすような環境破壊をするに至った。これこそが、今「人新世」と呼ばれるようになった時代への門を開いていくことになる。

一旦、「第三の世界」が確立してしまうと、そこから「第二の世界」への多大なる影響は、かつてエドガール・モランが採用していた「ホモ・デ

メンス（錯乱する人間）」という名称に相応しいような現象を招来するに至った。実際に、言語進化は脳の進化よりもはるかに速い。脳の進化は何十万年といった想像を絶するほどの大きな単位で変化していくが、言語の方は、数百年という時が立てば、見分けがつかないほど変化してしまう。例えば、映画『バック・トゥー・ザ・フューチャー』の主人公は、ただか数十年前にタイムスリップするというだけで、「記号一対象」関係が変わってしまって、使用している語に対する意味の違いが原因で、彼が所属していないその時代において変人のように扱われることになってしまう。言語は進歩の兆しを一代が体験し得る形で示し、短期間の内に意味や用法も変わっていくのである。このように変化が著しいゆえに、「第三の世界」は、あっという間に巨大な影響力を人間の心にもたらすようになったと考えられる。

デネットは、『解明される宗教』という本の冒頭部分で「蟻と寄生虫」の話を紹介している。そこで、彼は、何度落下しても、細長い葉の頂上を目指し続ける蟻の姿を描写している。この、蟻の利益には決してならないシシュポス的な行動は、一体何のために行われるのだろうか、と読者が訝り始める頃、デネットによる種明かしが始まる。実は、哀れな蟻達は、この不思議な行動をする蟻の脳内に寄生する鋭尖吸虫の子孫の利益になる位置を目指すよう駆り立てられているのだ。私達、人間が、殆ど気にも留めないこの蟻と寄生虫の世界に目を向け、私達が驚きの声を上げ、一体何のためにこの小さな物語を読んでいるのかを忘れかけた頃、デネットは、こう述べる。つまり、この寄生虫は「観念」に似ているのだ、と。確かに、私達、人間界において、「観念 (Idea)」なるものは、この蟻に対する寄生虫のように、人間の脳内に寄宿し、人の言動を支配する。これを広めるために幸福や家族を持つ機会、さらに自分の命をも捧げるものまでもいるのだ。例えば、ドストエフスキーの『悪霊』では、「神が存在しなければ何をしてもいい」という観念に憑かれ、自殺を選ぶことで神になろうとするキリーロフなる男の姿が描かれている。これは小説の中の話だと言う向きには、ネット経由で「イスラム国」に共鳴し、「聖戦」に参加しようとしている先進国の若者達がいることを思い起こして欲しい。まさに、「観

念」のためには、殺人をもよしとし、自分の命さえ犠牲に捧げるということを人間はしているのだ。一旦、脳内に「観念」が巣食うと、まさに鋭尖吸虫のように、ホストの思考法を支配し始め、容易にはそれから離れられなくなってしまうのである。このように、「第三の世界」を形作る様々な「観念」は、人を支配する力を持つのである。

特に、文字という歴史的発明が顕著になって初めて「第三の世界」の、「心」からの独立と心に対する多大な影響力がようやく見えるようになってくる。文字という「心」に対する外在物は、書物や最近ではデータベースという形で、人間の文化を豊かにし、無数の「観念」を生み出すことで、「歴史」という「物語」だけではなく、個々の人生を「物語」に置き換えることを可能にできた。

デイヴィッド・リンデンは、『快感回路』の中で、有用性が無い、抽象的な知識のための知識でも、「快感/報酬回路」を働かせることがあり得るといふ実験を紹介し、「観念」を「依存性薬物」に喩えている。彼はこう書いている、「私たち人間は、本能から離れたまったく任意の目標達成に向けて快感回路を変化させ、その快感によって自らを動機づけることができるのだ」(p.11) と。ドーキンスが「ミーム」と呼んでいる、生物学的な遺伝子とは別様の括弧付きの「遺伝子」が、「第三の世界」から「第二の世界」へ浸透し、人間を鋭尖吸虫に支配された蟻のようにしてしまい、時には依存薬物のごとき振る舞いをしてるのである。こうして私達は人生に「意味」を求めることで、「第三の世界」において生き永らえようと試みる不可思議な生き物になってしまった。そこで、私は、「第二の世界」から「第三の世界」へ至る経路を、ダーウィンに敬意を表して、「ダーウィンのベクトル」と呼び、「第三の世界」から「第二の世界」への経路を、ウォレスの強調したラマルクの可能性に敬意を表して、「ウォレスのベクトル」と呼ぶことにしたい。

人類は、「完新世」と呼ばれる、気候的に比較的恵まれていた時代において、まさにこの「第三の世界」を発展させてきており、その多大な影響の下、文明的、文化的繁栄を享受してきた。「人類史」の舞台でもあり、前提ともなっている「完新世」こそが、比較的温暖な期間をもたらしてい

たという意味合いにおいて、決して人間の意識に上ることのなかった「偽りの平和」の時期なのだ。それは、地質学的なスパンで見れば「束の間の平和」であり、「人新世」に入った現在においては、まさに「偽りの平和」と呼んでしまっている。ダーウィンのベクトルは、その進行の遅さゆえ、人間の意識のレベルは言うに及ばず、「第三の世界」における「歴史」の中においても、まったく感知されることのない、「第一の世界」に属する事象なのだ。特に、近代を決定づけた「啓蒙思想」における「進歩思想」による人類の進歩発展に向かう直線時間の中には決して姿を現すことのない事象だったのである。「第三の世界」即ち「意味の次元」におけるウォレス的ベクトルの速さは、「ドッグイヤー」と呼ばれるようなテクノロジーの人間の理解をも超えた速さで進む時間をもたらしたのである。

こうして、言語を基盤とした「第三の世界」が人間の進化を追い越す速度で成長し、「第三の世界」そのものが環境となることで、人間の心は言語に適應するという形で進化するようになる。言語によって可能となった「第三の世界」との共進化という、進化の通常の流れからはかけ離れた事態が、精神分析が「本能の壊れた動物」として人間を定義せざるを得ないような状態を招いたのだ。人間を単にその生物学的な条件からのみ論じることのできない理由もここにある。人間は「観念 (Idea)」によって支配され、観念によって己を意味付け、正当化する生き物と化し、「観念の闘争」、即ち、「イデオロギー闘争」に己の命を賭けるようにまでなっていく。支配的な「観念」は、「大きな物語」を形成し、その中で人間が己の人生の意味を見出すためには不可欠であるものと見做されるようになった。つい最近までは二つの「大きな物語」が東西冷戦の基底において作動しており「イデオロギーの対立」が、まさに「第三の世界」の中で展開してきたのである。

第2節 脱イデオロギーの世紀

冷戦終結後は、それまでは「社会主義」に遠慮していた資本主義が、剥き出しの力を前面に打ち出してきて、「国民国家」の統制をも外れて野放図に展開を始め、グローバル化を推し進めていっ

た。対抗イデオロギーが籐として機能していた時代が終わりを告げ、市場はグローバルに拡張し、その中に取り込まれていった人々は、巨大に膨れ上がった経済システムの中で消費者としての最適化を図るだけで事が済むようになっていく。それゆえ、今や運命を共有することとなった地上の人々に改めて新しいイデオロギーを吹き込む必要はなくなったがため、フランシス・フクヤマは、かくて「歴史の終わり」を唱えた。「歴史の終わり」以降は、もはや自己正当化のためのイデオロギーや保守すべき理念等から自由となった資本主義が、「新自由主義」の名の下、まさに、野放図に「利潤だけを目的」にするという資本主義本来の姿を取り戻したということの意味している。歴史を背負い込むのを止め、自分の「目の黒い内の利益」に盲進していくという剥き出しの飾らぬ資本主義が「何のための成長か」という政治的な疑問を脇に追い遣り、「成長のための成長」という大義だけで稼働し始めたのである。

そもそも、フクヤマが「歴史の終わり」を提唱したのは、自由民主主義の対立理念である共産主義がソビエト・ロシアの崩壊によって事実上消え去ったことで、歴史の弁証法的発展が終わりを告げ、全ての歴史的問題は、新自由主義的資本主義のグローバリゼーションによる拡大と消費社会的な民主主義の受容によって解決すると考えられるようになったからだ。対立していた二つの「大きな物語」の内、一つが無効を宣告され、敗れ去った。確かに、冷戦の間、当時は「西側諸国」と呼ばれていた資本主義側も、「社会主義」に対抗し、革命の気運を削ぐために、社会主義的な性格付けを施さざるを得なくなり、ケインズ主義的な「大きな政府」路線を保持していた。しかし、冷戦終結後は、「社会主義」に遠慮していた資本主義が、まさに、剥き出しの力を前面に打ち出してきて「国民国家」の統制をも外れて野放図に展開を始めグローバル化を推し進めている。

内橋克人の『経済学は誰のためにあるのか』の中で、経済学者、宇沢弘文は、ベトナム戦争を経験したアメリカは倫理的な混乱を経験し、「倫理的な崩壊の後だからこそフリードマン流の考え方が大きな流れになっていった」(p.82)と述べている。宇沢は、市場への信仰が、倫理的荒廃を背景に出現したことを指摘している。フクヤマは

「イデオロギーの終焉」を、宇沢は「倫理的価値の崩壊」を、「市場原理主義」の隆盛に結びつけている。「脱価値」、「脱イデオロギー」、一言で言えば、「脱意味」という形で、「世界観」という次元における自己正当化を必要としないものとして「市場」が登場することになる。即ち、「第三の世界」を統制する原理としてのイデオロギーから脱却するという意味において、ハイエクが自生すると唱えた「市場」を中心に「政治的抗争」とは別の次元において、社会システムを展開しようと考え始めたのだ。

「歴史の終わり」とは、従って、今までは必須だった正当化のためのイデオロギーや保守しなければならぬ伝統といった「思想上の対決」が消えたと思われ、誰もが「自由」の名において、目先の利益を追求するという分かり易さだけを指針に生を貫徹し得ると考えるに至ったということの意味する。こうした傾向の延長線上において、人文科学を軽視する風潮が出てくる一方、システム合理化に貢献し得る技術的知をもたらす諸学問は表舞台に立つようになる。しかし、生産活動を促進する技術は、富の生産を向上し、予想可能性を高め、システム合理性の精度を上げるのに多大な貢献をしていくことになるが、この科学技術自体が、人間存在をも脅かしかねない負の影響を孕んでいることが明確になっていく。言い換えれば、科学技術が、ウルリッヒ・ベックの言う「リスク」を生み出す時代、即ち、「リスク社会」が訪れるということだ。

思想や伝統から切り離された人々は「剥き出しの個人」となり、自己の言動に対して「自己責任」が追及されるようになる。ベックの「リスク社会論」における「再帰的自己」がこうした事態に対応している。「再帰的自己」とは、主体が自己の外部に依存せず自分の全ての行為を自己決定し、その行為の結果にも責任を持つという在り方を指す。ベックが「リスク社会論」を理論化していったのは1980年代後半から1990年代にかけてであるから、フクヤマが「歴史の終わり」を唱えた頃の歴史的な背景を共有している。

ベックの言う「リスク社会」において、私達が経験するリスクは、自然の回復性に委ねることによって解消し得るようなものではない。そうしたリスクは、自然そのものからの逸脱を内包してい

るからだ。それは当然ながら、人間活動が自然に大きく影響し、今度は逆に自分が弾みをつけてしまった自然の影響力を解消し得ず、己の生物学的な基盤をも脅かすような事態を招いてしまったからである。こうしたリスクの効果を減じるためには、さらなる科学的技術的な介入によるしかなくなるのだが、この介入自体が、別の予見不可能なリスクを生むということになるだろう。かくて、自己再帰的なループに囚われてしまうことになる。技術が生むリスクに対処するための技術が再び不確定要因を含み、それがリスクに帰結してしまう、といったループに囚われてしまうというわけだ。技術による自然への介入という「現実への関わり方」、ハイデガー的に言えば、この時代の「ゲシュテル (Ge-stell)」が「リスク社会」をもたらす結果となった。

ハイデガーによれば、現代技術の本質は「ゲシュテル」で「総かり立て体制」と訳されている。「総かり立て体制」とは、「現実的なものが徴用物資として顕現させられるあり方」(p.128)である。この「総かり立て体制」の中で、周囲の物が全て「最適化可能な資源」として現れるようになる。森は、かつては「神が住まう場所」だったが、今や単なる「木材の供給源」としてしか見られない。土地は、今やディベロッパによって都市開発され利益を生み出す手段としてしか見られない。「総かり立て体制」の中では、自然だけではなく、生身の人間も「商品」と化し、就職市場に向けて最適化を図るよう仕向けられ、代替可能な「人材」に変換されている。今や、人はこの「ゲシュテル」と呼ばれる「枠組み」から抜け出す術を知らない。この「ゲシュテル」と呼ばれる、現れの「技術的」様相は、他の一切の現れ方を駆逐する独特で危険な力を持っている。

ハイデガーの言葉通り、技術的世界観の中で、現われの一元化による思索の支配が起きてしまっており、技術によってもたらされた弊害は技術によって解決しなければならないというマインドセットの中から抜けられない、想像力の貧困が起きている。例えば、クルツェンは「成層圏エアロゾル注入 (Stratospheric Aerosol Injection)」の頭文字をとって「SAI」と呼ばれる手法を提案している。けれども、技術が生むリスクに対処するための技術が再び不確定要因を含み、それがリス

クに帰結してしまう、といった自己再帰的なループに陥ってしまう可能性を排除できない。それゆえ気候の非常事態の判断そのものは、気候科学者の判断に委ねることのできないものになってしまうわけだが、政治的決断の失敗は激烈な打撃を人類にもたらしかねないゆえ、国民国家体制下において、責任を担い得る政治家は皆無だろう。

『ポストモダンの共産主義』においてジジエクが述べているように、1990年の社会主義崩壊以降、「経済学はついに完全に実証済みの科学になった」(p.44)。「第一の世界」の法則を映し出す学問分野として、ニュートン以降台頭してきた自然科学のように、社会科学も「人間社会」の法則性を見出し、一つの科学として己を打ち立てようと試み、経済学が「市場原理」を見出すことで、自然科学に近似したと考えられるようになっていく。「第三の世界」が「意味の次元」から解放されて、自然科学的な法則性を見出し、それによって統制することが可能であるのならば、「脱イデオロギー」的な社会システムを展開できるということになるだろう。冷戦のイデオロギー闘争に疲れた人々は、「他に選択肢はない」というサッチャーの宣言を合言葉にして、「市場原理」を中心にして社会システムを展開するべく「新自由主義」へとグローバルに転換していく。

ジジエクが指摘しているように、資本主義は「あらゆる文明に順応できる」(p.48)という意味合いにおいて、「世界観」や「イデオロギー」といった「意味の次元」における正当化を必要としない制度なのだと言えよう。実際に、そうしたものとして、逆にあらゆる文明に順応できるので、今や、中国のような共産主義的な計画経済の片鱗を残すような社会の心臓部にまで浸透し、資本主義の「脱イデオロギー」的な中立性を際立たせている。

しかしどうだろうか。ジジエクも強調しているように、「資本主義を中立な社会制度だと考えること自体が、純然たるイデオロギー」(p.48)なのではないか。市場の自由は自生的であるがゆえに自然なものであるなので、政治的な規制によって制御しようと考えすることは間違っているとして、「市場」を聖地化しようとしていること自体が、実はイデオロギー的なものだ、ということは、「市場原理主義」任せにしようとした19世紀イギリ

スや20世紀初頭のアメリカによって行われた「レッセフェール」の実験の失敗を見ても分かる。グレイも言うように、「自由市場は国家権力が介入し作り出したもの」(p.24)であり、中央からコントロールされねば「レッセフェール」は存続し得ないのである。

第3節 「偽りの平和」は終焉に向かうのか

人間がここまで繁栄し得たのも進化の過程で「第三の世界」を生み出し、「第三の世界」から「第二の世界」、即ち、「心的次元」に対して働く「ウォレス的ベクトル」の巨大な影響力を受け、進化の時間よりも影響力の点では遥かに素早く強力な「進歩」の「直線時間」によって「第三の世界」そのものを制御し始めたからである。しかし、この「ウォレス的ベクトル」は、「第二の世界」に大いなる変化をもたらしただけに止まらず、今や「第一の世界」にまでにその影響力を及ぼし始めた。「第三の世界」の影響力があまりにも巨大化し「第一の世界」にまで浸透し、その在り方をも変えてしまうようになったこの時代こそ、「人新世」と名付けられるようになった時代なのである。それは「第一の世界」を支配する「進化の時間」をはじめとする「自然の時間」の脅威にさえなってしまうような巨大な力となり、自分達の制御を超える影響力を地球生態系そのものに及ぼすようになった。換言すれば、「ヒト」という生物種の活動と相関関係を持って変化する「変数」としての地球環境に変わってしまった年代が「人新世」なのである。「第三の世界」の影響力が「第一の世界」にまで及ぶようになったということを実感せざるを得ない、この「人新世」と呼ばれる時代に、「第三の世界」の絶大な影響力を「気候変動」という形で私達が意識し得るようになったということは大変大きな出来事なのである。

冷戦後、人間は、啓蒙主義的進歩の時間をイデオロギーによって制御するのではなく、脱イデオロギー的に制御しようと、「純粹市場」に委ね、進歩を「成長のための成長」と規定し、その推進力となる技術革新をもたらす「テクノロジー」の進歩に己の命運を賭けるようになってしまった。これこそが後期近代を支配した「システム化」と

いう出来事の背景を担う思想的変化なのである。マルクス・ガブリエルも言うように、「新自由主義」は「連帯や国家、組織の構造を純粋な市場戦略によるシステムに置き換えることができる」とする経済概念」(p.12)なのだ。この「新自由主義」が、ガブリエルの見立てによれば、コロナ危機に瀕して機能不全に陥っていると、新型コロナの蔓延ゆえに、「新自由主義」は終焉を迎えると言い切っている。なぜならば、「生物学的な構造は、経済的な構造とは完全に異なるモデルに依存する」(p.12) からだという。ガブリエルの指摘している通り、「生物学的な構造」は「第一の世界」に属するものであり、それに対して「経済的な構造」は「第三の世界」に属するゆえ、両者は全く異なる構造を有している。

マイク・デイヴィスが『感染爆発』で指摘しているように、都市がスプロール化して周辺に広がることで、今までの方法で生活を支えることができなくなった部族が野生動物を食すようになり、チンパンジー経由でエイズが人間界にも広がるようになってしまった。熱帯雨林の破壊によって、そこに生息する生き物を宿主にしてきた病原性ウイルスが人間社会に入り込んでくるようになったということである。エイズだけではなく、西ナイル熱ウイルスやエボラ出血熱ウイルスは多くの人命を奪っている。

2020年のコロナ禍が武漢発祥であることの原因として、都市のスプロール化に伴って無秩序に開発されていく中国山間部の自然と生鮮市場との関係が指摘されていた。開発による自然の破壊に加えて、気候変動の影響で、人為的な原因で引き起こされつつある6度目の大量絶滅によって、生物多様性が損なわれつつあることが、ウイルスの宿主に影響し、ウイルスが生き残りをかけて変化を起さねばならないような状況が生み出されてしまっている。経済のグローバル化は確実に「第一の世界」に負の影響を与え続けてきたのだ。新型コロナウイルスの場合、元々、キクガシラコウモリが保有していたSARSウイルスが変異したとされ、センザンコウのような中間宿主を媒介に変化していったとされている。

こうした「人獣共通感染症 (Zoonosis)」と呼ばれる、ヒトとそれ以外の脊椎動物の両方に感染または寄生する病原体より生じる感染症との闘い

は人間が定住をしてから続いている。定住した人間は家畜化を進め、それとともに動物由来の伝染病を取り込んでいく。犬からは麻疹、牛からは天然痘、アヒルからはインフルエンザ、また貯蔵した穀物を食べるネズミからはバストといった具合に、動物由来のものが人間社会にも蔓延し、感染症との闘いと共存の歴史が始まる。人間社会に定着した感染症をもたらず病原体は、潜伏期間が長期化し、弱毒化していくようになり、人間を宿主とし、共生を目指す方向で進化していく。進化生物学の「赤の女王仮説」によると、複数の集団が一緒に競い合っている時、適応とそれに対する適応は、お互いに共存し得る形になっていく。コロナウイルスは、紀元前8000年には既に存在していたとされており、一部は5500万年以上前から、コウモリとの長期的な共進化を遂げてきたとされている。「ヒトコロナウイルス」は、7種類存在し、1960年代から幾度も感染拡大を続け、その都度、「新型」と呼ばれてきたが、コロナの病原体と人間との共進化が何をもちたらずのかは完全に未知数である。

人間も生物であるがゆえに、「第一の世界」の住民でもある。そのことが意味していることが何なのかを残念ながら私達は未だよく理解しているわけではない。例えば、ヒトゲノムの内、レトロウイルスに関連した配列は40%を超えていると言われている。つまり、これは、ウイルスという「生命」と見做すための条件を欠くとされる実体によって直接構成されているということだ。つまり、「非・生命」あるいは「非・物体」という無限判断によってしか規定し得ない実体と身体性の次元では深い関係性を維持しているということなのだ。『エチカ』で、「私達は身体が何をなし得るか知らない」とスピノザが語っているように、「第一の世界」に属するものとしての「身体」が如何なる存在なのかを知らないのである。ヒトの胎盤にある「合体栄養膜細胞」を形成する働きをされるとされる「シンシチン」というタンパク質は「ヒト内在性レトロウイルス (HERV)」の一種が持つ遺伝子に由来すると言われている。「合体栄養膜細胞」は胎児に必要な栄養素を通過させるが、母親のリンパ球が浸透してしまうことで、本来は母体にとって他者であるはずの「胎児」への攻撃が起きぬよう防いでくれている。ス

クワイアとカンデルが『記憶のしくみ』の中で述べているように、進化は不器用な修繕屋（プリコロール）であり、手持ちの遺伝子をその時々でわずかに違った様式で繰り返し再利用しているだけだと言うのなら、レトロウイルスがヒトの体内に差し込む遺伝子が進化のプリコラージュで使用されていても不思議はないだろう。こうした事例から考えても、ウイルスとの身体性の次元における交流・共生は、「第三の世界」の用語を使って「悪」と必ずしも呼ぶことができない。「進歩」の時間意識、ましてや人間のライフスパンといった時間尺度からは窺い知ることのできない、進化の時間は「第一の世界」に属している。

結 語

人間のライフスパンはせいぜい100年で、「目の黒い内」のことにしか想像力が及ばない。資本主義は、人間の「目の黒い内」の欲望を駆り立てることで駆動しているため、それ以上のことは中々視野に収めることができない。「歴史学」の視座から見ても、「人類史」に視野が限られてしまうと、意味が構成される「第三の世界」を通時的に総括し得る程度になってしまう。「第一の世界」の遠大な時間は、人間の視座からは中々捉え難いが、考古学、地質学、古生物学、進化生物学などの学問分野が過去に蓄積してきた証拠から、その遠大な時間の痕跡を垣間見えるようにしてくれている。人間は「第三の世界」の中で「イデオロギー闘争」を繰り返してきたという歴史がある。しかし、今や「第三の世界」を統制する原理となった「グローバル市場」による「新自由主義」という形の資本主義とそれを牽引する「テクノロジー」による「進歩史観」の実にせつかな時間が「第一の世界」を変質するだけの強大な力を持ち始めている。

かくてグローバルに拡張した経済システムは「グレート・アクセラレーション」によって環境破壊をもたらした。そしてその結果こそが「気候変動」なのである。「第三の世界」におけるイデオロギー闘争において覇権を争う人類ではなく、今後、「第一の世界」において進化の時間を生き延びる可能性がある人類か否かが問われるのだろう。「第三の世界」に起因するとは言え、「第一の

世界」に波及することで確実に生命圏に負の影響を与え、人間の生物学的条件を脅かすことになる「気候変動」のような出来事には、国家単位では到底対処し得るものではない。地質学的な安定期にあったがゆえに、人類は「第三の世界」において「歴史」を物語ることが可能だったのだが、今やその歴史を展開する土台にあたる「第一の世界」が壊乱され、人間の生物学的な基盤をも脅かそうとしている。「第三の世界」即ち、「意味の次元」における対立や小細工などは「第一の世界」から迫りくる危機に比べたら取るに足りないものであることを自覚し「意味の次元」における対立を乗り越え、国際協調路線を共に歩まねば確実に破局が待ち受けているのである。

引用・参考文献（引用頁は本論中に記す）

- 内橋克人、1997、『経済学は誰のためにあるのか』、岩波書店。
 エリック、R.カンデル&ラリー、R.スクワイア、2013『記憶のしくみ』（上下）、小西史朗他訳、講談社。
 ガブリエル・マルクス、2020、『マルクス・ガブリエル 危機の時代を語る』、丸山俊一編、NHK出版
 ジジエック、スラヴォイ、2010、『ポストモダンの共産主義』、栗原百代訳、筑摩書房。
 デイヴィス、マイク、2006、『感染爆発』、柴田裕之他訳、紀伊国屋書店。
 デネット、ダニエル、2010、『解明される宗教』、阿部文彦訳、青土社。
 ハイデガー、2019、『技術とは何だろうか』、森一郎編訳、講談社。
 フクヤマ、フランシス、2020、『歴史の終わり』上下、三笠書房。
 ベック、ウルリッヒ、2003、『世界リスク社会論』、島村賢一訳、平凡社。
 モラン、エドガール、1984、『失われた範例』、古田幸男訳、法政大学出版局。
 ラマチャンドラン、V.S.、1999、『脳のなかの幽霊』、山下篤子訳、角川書店。
 リンデン、2012、『快樂回路』、岩坂彰訳、河出書房新社。
 レイコフ、1993、『認知意味論』、池上 嘉彦他訳、紀伊国屋書店。
 Popper, Karl, R.,1972, *Objective Knowledge*, Oxford: Oxford Univ. Press.

[2021. 9. 16 受理]

コントリビューター：山内 廣隆 教授
 （ビジネス心理学科）